

JSOG Newsletter

Reason for your choice

No.12
April
2013

わたしたちの医療は“新しい生命”を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

公益社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

シリーズ 産婦人科サブスペシャリティへの道

若手医師に聞く 03 婦人科腫瘍編

第一線でサブスペシャリティ取得を目指して邁進する若手医師を、各分野で特集します。第3回「婦人科腫瘍編」は、筑波大学附属病院婦人科の櫻井学先生です。



私の毎日

私は現在、筑波大学附属病院の婦人科に勤務し婦人科腫瘍専門医を取得すべく、日々精進しています。週3件程度の手術や自分が担当した患者さんの外来での化学療法やフォローアップ、週に1回茨城県地域がんセンターでも外来を担当しています。患者さんのほとんどは悪性腫瘍の方なので、多くの不安を抱えています。同じ病気でも当然、患者さんの状態は異なりますので、状況に合わせて適切な対応をするよう心がけています。それ以外の時間は学会発表や論文作成の準備に充てています。

婦人科腫瘍のサブスペシャリティを目指したきっかけ

もともと新生児や周産期に関わりたくて産婦人科腫瘍専門医の魅力であり、使命であると思います。さらに、HPVワクチンの普及やロボット手術の導入など今後も様々な展開が予想されます。学ぶことはまだまだたくさんありますが、幅広いスキルを身につけていけることは、とてもやりがいがあります。



人科になりました。そんな私の考えが変わったのは「手術」です。手術では時として術前に予想し得なかった事態に遭遇することもあり、その場での判断、力量が問われます。癒着胎盤の帝王切開で止血に難渋していた際、吉川教授が手術室に駆けつけて、鮮やかに止血をした姿がとても印象に残っています。そうしたことをきっかけに、しっかりとした手術ができるようになりたい、と思うようになりしました。

婦人科腫瘍専門医の魅力

婦人科における悪性腫瘍の治療戦略は様々で手術、化学療法、放射線療法とどれも欠かすことができません。患者さんと向き合っていくためには、それらの治療に精通して、患者さんの治るチャンスを逃さない、という姿勢が大事です。また、妊娠性をいかに保つかという点も特徴です。妊娠性は直接、命には関わらない問題かもしれませんが、だからこそ、非常に悩ましく、冷静な判断が必要になることがあります。今後、新たなエビデンスを構築して、未来への可能性を追求していくことができるのも婦人科腫瘍専門医の魅力であり、使命であると思います。

また、2011年の震災の際、当時勤務していた「がんセンター」に妊婦さんが運ばれて来られた。院内に分娩室がなかったため、救急センターでの分娩となりましたが、無事に産まれたときは、センター中が拍手喝采に包まれ、命の持つ大きな力を感じました。とかく病気に関わることが多いのが医師ですが、産みの喜びに関わる、また、専門を様々な選択肢から選んでいく、それが産婦人科です。日本の未来のために、ともに歩んでいきたいと思います。

医学生、研修医の先生方へのメッセージ

みなさんには是非、Reason for your choiceのback numberも読んでいただきたいと思えます。生殖内分泌、周産期医学の専門医を目指している医師の記事が出ています。きっと、産婦人科学の幅広さが分かってもらえると思います。私が1年目の時、子宮頸部上皮内癌で円錐切除術を受けた方が、体外受精で妊娠成立したものの、切迫早産になり長期入院していたことがありました。産婦人科医になっても女性の一生と次世代の未来を守ることに繋がっているのです。

過去最大の演題申込み

羽ばたけ、世界へ、未来へ

第65回日本産科婦人科学会学術講演会
会期：平成25年5月10日(金)～12日(日)
会場：北海道札幌市内

近年のグローバル化社会に、医学の分野も取り残されるわけにはまいりませぬ。我が国の産婦人科学の国際化が櫻木会長の願いです。今回は全国から1700題にも及ぶ演題の申し込み、海外からの演題申し込みも約100題に及び、過去最大級のものとなりました。いくら広い北海道とは申しませんが、会場には限りがあり、すべての方に発表の機会を提供することが叶わなかったことが心残りです。

教科書では学べない！

本会では産婦人科学に含まれる4大領域(周産期、腫瘍、生殖、女性ヘルスケア)に関する教育的な数々の講演が行われます。既に産婦人科を専攻している医師の皆さんだけではなく、産婦人科学に興味のある学生、初期研修医のみならずは普段教科書から得られる知識の再確認、あるいは教科書だけでは得られない役に立つ知識を手に入れることができると思っています。

多種多様なプログラム

前回から始まった専攻医

専攻を決める前にぜひ！

このように学生、研修医の皆さんにも有益な機会を提供できるように私たちも努力しています。「まだ専攻も決めていないうちに学会参加なんて…」とおっしゃらずに周囲の産婦人科の先輩におねだりして(？)、ぜひ参加してみてください。5月の札幌はともよい季節です、お待ちしております！

学術講演会参加費優待

- ★ 医学生 無料
- ★ 初期研修医 (非会員) 3,000円
- ★ 初期研修医 (会員) 無料

※学生証、証明書をご提示ください。



SUMMER SCHOOL 産婦人科サマースクール in盛岡 2012.8.11-12

被災地「東北」での開催

東北地方が東日本大震災の被害を受けておおよそ1年が過ぎ、学会として、東北地方で活躍されている同僚の皆さんを応援しよう！そして被災地域の現状を知り、その復興に協力しよう！という趣旨から2012年の日本産科婦人科学会サマースクールは盛岡市で開催する運びとなりました。

前日に被災地を訪問

恒例のプログラムに先立ち、8月10日には宮古市を訪問し、被災地の現状を実際に目に肌を感じる機会をもちました。まだまだ多くの方々が仮設住宅で不自由な生活を余儀なくされている中、一向に進展していないように思われる現地の姿を目の当たりにし、産婦人科

医師としてだけではなく、同じ日本人として早急な対応を願わざるをえませんでした。訪問地では宮古県立病院の皆さまのご尽力により、「宮古フォーラム」を行うことができました。フォーラム終了後は宮古市でご活躍されておられる若手医科大学産婦人科教室同門の皆様のご厚意で、快い親睦会を行わせていただくことができました。

一日目のプログラム

8月11日、12日とサマースクールの本番では、産科超音波診断、婦人科腹腔鏡下手術、そして婦人科腫瘍に関する講演ののち、実技実習に移りました。今回の婦人科腫瘍診断実習では各グループに顕微鏡が準備され、実際の手術標本を鏡検し診断するという、より実践的な実習が行われました。懇親会の後のアドバンスコースでの実習も大盛況でした。産科コースでは新生児蘇生の実技講習や分娩シミュレーターに参加者指導者みな汗だくで遅くまで取り組んでいる姿が印象的でした。また、婦人科腫瘍コースでは全国で導入が進みつつある「悪性腫瘍に対する腹腔鏡下手術」そして、近い将来我が国でも導入が進むであろう「ロボット手術」に関する興味深い講演が行われました。アドバンス実技コースでは今回のサマースクールの目玉であるロボット手術練習シミュレーター「Minc」が準備され、皆興味津津で長蛇の列ができておりました。また、生殖医療アドバンスコース

では顕微鏡の実際の実技を経験する機会にも恵まれました。各領域の実技、また数々の最新トレーニング機器をまとめて体験できる、まさに産婦人科サマースクール独特の醍醐味を参加者一同味わってくれたことと思います。深夜にまで及んだ初日の全プログラム終了後は夜の総懇親会で所属施設に関係なく先輩、後輩皆が胸襟を開き本音で語り合う姿が見られ、多くの仲間たちを得た思いがしました。

二日目のプログラム

二日目は、若手医師主催によるプログラムが行われました。若手とは言っても10年前後の経験を積み医師としての責任を担い始めた中堅医師たちが、学生や初期研修医の純粋な疑問に堂々と答え、産婦人科医療に携わることの魅力を力強く述べていただきました。次回は例年通り長野県松本市での開催に戻ります。引き続き多くの学生・初期研修医が参加してくださいことを願っております。

参加者の声

きっかけは、「私は被災地見学ツアーには行けないから、おばあちゃんと私の代わりに被災地を見てきてよ」という母の一言でした。祖母や曾祖母にゆかりの東北地方の被災地をこの目で見たいと思い、参加を決意しました。若手県立宮古病院では、当時の貴重なお話を聞くことができ、自分が将来医療従事者としてこのような大きな災害に遭遇したときに、何を考えどういった行動を取るべきかを学ぶことができ、学生の身分には贅沢とも思えるほどの充実した時間を過ごし、同じ医学を志す仲間との出会いも、良い刺激となりました。また、学会委員の母とは、結局お互い照れながら、家にいるより多くの言葉を交わすこととなり、意外なところで母娘の絆を深めることができました。このような貴重な経験を場を提供して下さったすべての方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。

東京医科歯科大学医学部医学科 6年

宮城夏子

学会の委員でありながら、産婦人科サマースクールに子供が参加する親の視点からもこの学会企画を見つめるという貴重な体験をさせていただきました。自分が産婦人科医師となって20数年、後に続く世代の産婦人科医師のために、まだまだ変革の必要があるということをも以前にもまして強く感じ続けた2日間でした。

横浜市立大学附属病院 産婦人科 宮城悦子

グループに分かれ、講義を聞いたのちに最先端の手術器具を使った体験実習。産婦人科医の業務の実態について、その一部を体験し学習できるように組まれたプログラムであると感じました。そして勉強した後は楽しい宴会もあり、参加した全員が一体感をもって大いに楽しんでいました。

また、男女に別れたプログラムの男性側では、若手の先生方による「ギネトーク」という企画が行われました。「患者さんは女性の産婦人科医を望んでいるのでは」という悩みを抱える学生を勇気づける良い企画だったと思います。

全日程を通じて産婦人科医の方々から伝わってきたのは、産婦人科の魅力や伝えたい、若手の人々を育てたいという熱意でした。ぜひ来年も、今度は研修医として参加させて頂きたいです。

北海道大学医学部 6年 藤井タケル

私が産婦人科を志した理由はその領域の幅広さ・多様性にあります。周産期から更年期、良性から悪性腫瘍と幅広い年代の女性における種々の疾患を治療対象とし、腹腔鏡手術や開腹手術などの外科治療だけでなく、薬物治療や精神的ケアなどの内科治療を組み合わせ女性の一生涯をサポートしていく点に魅力を感じ、専門領域として進む決意をしました。実際、数ヶ月診察に携わらせて頂き、そこで出産の喜びや、不妊のつらさ、悪性疾患に伴う苦悩を共有し、産婦人科診療のやりがいや必要性を改めて認識しましたが、同時に治療の限界も感じました。

産婦人科医としての旅立ちと心に抱く夢

京都大学・植田彰彦

初期研修医の声

初期研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

「産婦人科医になりたい！」そう思って医師になり、現在、初期研修2年目の産婦人科ローテート中です。自分の目指す医師像となる先輩医師にも数多く会うことができ充実した日々です。生まれる瞬間に感動をおぼえながら過ごしていますが、婦人科疾患・産科救急・新生児異常などの死と隣り合わせの現場も経験し、自分が今後学ぶことの多さを知りました。

産婦人科医になりたいと思ったきっかけは、年の離れた弟が極低出生体重児で生まれた事です。不安そうな両親を励まし、支えてくれた産婦人科の医師・看護師によって家族に明るさが戻ったことを体験し、産婦人科の仕事は家族に

笑顔を与えることができると感じました。今はまだ産婦人科を少し知ったに過ぎない段階ではありますが、今後一つでも多くの家族に明るい笑顔をもたらす産婦人科医師になりたいと思っています。来年度から産婦人科専攻医として学べる事がとても楽しみです。

明るい笑顔をもたらす産婦人科医師に

東北大学・井ヶ田小緒里

